

「^{あっぱ}天晴れ」

マタイによる福音書 11章28節

コリントの信徒への手紙一 13章13節

聖学院大学 政治経済学部長 標 宣男

私はこの3月で定年を迎え、25年間に亘る本学の専任教員の職を辞しますので、今日のこの奨励がこのチャペルでの専任としての最後のものとなります。ところで今朝は、本学の日本文化学科の教授として国文学を教えていました私の妻、故標 宮子の父のことをお話しようと思います。山梨の田舎に住んでいた義父は2002年11月17日、93歳で亡くなりました。90歳を過ぎ肺に癌が見つかり、年齢のこともあり本人の希望を入れ、手術をせずに投薬のみの治療を選択したのですが、1年あまりの闘病の後天に召されました。義父は亡くなる少し前に「万歳、万歳、天晴れ、天晴れ」という言葉を残して逝きました。この言葉を聞いて皆さんは何のことかとお思いになったのではないのでしょうか。

妻の小さい頃の思い出の中にある義父は、めったに怒らなかつたものの、いつも不機嫌な顔をしており気難しい怖い人であったということでした。私と会った頃は、頭の鋭さを垣間見させるところはありましたがむしろ穏やかな風貌をしており、家族を愛し大切にしている様子が、父親を尊敬している子供達の様子からよくわかりました。その時は、何故これだけ優秀な人が、世に出ず山梨の田舎に埋もれてしまったのかと不思議に思ったものの、心の中に抱えているものまでは伺えませんでした。妻の言う気難しさの理由を私が知ったのは、結婚してしばらく経った頃のことでした。義父は東京帝国大学経済学部を卒業後、郷里の先輩石橋湛山が社長をしていた東洋経済新報社の記者になり、戦時中は「大政翼賛会」に入っていたようです。当然召集され、南方へと送られたのですが、途中病を得て帰国しました。実は、この帰国にはある偶然が関係していました。妻の母の兄弟は7人おり、義母が一番下のかつ唯一の女の子だったので兄達から可愛がられていたようです。その中のすぐ上の兄が軍医となっていました。戦地で体調が悪くなった義父は軍医の診察を受けに行きそこで偶然義兄と再会したということでした。その時、義兄との間に何があったかはよくわかりません。後に義父は、二人の子供達(妻の兄や姉)のために帰って来たと言っていたようですが、そのために日本に帰れるよう軍医である義兄に頼んだのか、あるいは可愛がっていた妹を未亡人にさせないため妹の夫を日本に帰国させるよう義兄が計ったのかわかりません。いずれにしても、戦時中とはいえ、肉親の情として有り得ることだったように思います。

しかし、戦争が終わり義父は急激に気難しく不機嫌になって行ったようです。この戦争では多くの人々が死にました。義父にとっても、何より自分を日本に送還してくれた軍医の義兄が病院船の撃沈

により南の海に沈みました。そして、当時大学卒ならば士官学校出身者でなくとも将校になれば、義父にも何人かの部下がいたはずですが、生死を共にするはずであったその部下や仲間の多くも戦死しました。にもかかわらず、自分はこういう形で生き延び彼らとともに死ななかつた、いや死ねなかつたという思いが義父を気難しくし、戦後の生き方を変えていったようです。それは、世間の表に決して出まいという強い意志となって現れ出しました。戦後、東京帝大卒のキャリアから、ある大学の経済学部の職を得たのですが、学部長に選出された途端に大学を辞めてしまい、その後高校の教員の職を得ても校長に推挙されたらたんその職を辞すという具合で、おおよそ〇〇長という肩書きが付くのを避け続けたということでした。その徹底振りは持ち回りの町内会長ですら引き受けないほどだったと言います。ですから、しばらくの間生活は不安定だったはずで。

ともに死ねなかつたという思いは、罪の意識として義父を一生に亘って苦しめました。癌を患い、絶えず死を意識し、死と向き合って生きた最後の一年においてもそうでした。その苦しみを見兼ねた妻の宮子は、所属していた滝野川教会の深井智朗牧師に義父を訪ねてくれるよう懇願し、深井牧師も東京から山梨まで何度も足を運び聖書について信仰について話して下さったのです。教育のためとはいえ、娘二人をミッションスクールの山梨英和に通わせ、子供達がキリスト教徒になることに何の反対もしなかつた義父は、深井先生の語る聖書の言葉に熱心に耳を傾けたようです。先に紹介しました義父の言葉は、そこで「全て重荷を負って苦勞している者は、私のもとに来なさい。あなたを休ませてあげよう」(口語訳聖書、「マタイによる福音書」11章28節)という御言葉を聞いたそのとき発せられたものです。父親の死から5年余り経った2008年、自分もまた癌になり余命いくばくもないことを、奇しくも受難節に知らされた妻が、復活祭を前に母に送った「手紙」の中にそのときの様子が書かれています。

お父様がなくなる前に深井先生からその主イエス・キリストの招きの言葉を読んでいただき、この世の一切の悩み、苦しみ、罪の重荷のすべてを主にゆだね、その苦しみから解放されて「万歳、万歳、天晴れ、天晴れ」と晴れ晴れと喜ばれたことを、つい昨日のこのように鮮明に思い起こします。主の十字架は彼を信ずるものが一人も滅びずに永遠の命を得るためであるという、神様ご自身の固い揺るがないご決意によるものである故に、お父様も心からの喜びの声を捧げることができたのです。

「あっぱれ」とは感動したり褒め称えるときに使う和語で、「天が晴れる」と書く漢字は当て字ですが、義父の心境にはこの漢字がぴったりのように思います。この時義父は「万歳、天晴れ」と確かに心からの開放の喜びを持って主を受け入れたのです。

しかし、結果として義父は洗礼を受けませんでした。それは義母を思つてのことでした。妻は父親の死の直後に、「コリントの信徒への手紙一」13章を念頭に次のような文章を残しました。

母の信仰を待っていた父

信仰と希望と愛とその中で最も大きなものは愛であるといわれた神は、一人置き去りになること

を哀れみ、母の歩みと歩調を合わそうとした父の生き方を許して下さったのではないか、母を置き去りにしないように心を尽くした父の心情を嘉して下さると、娘は信じ、父が遣り残した業を受け継いでいくことが、大切と感じている。

妻は父親の思いを受け継ぎ母親への伝道をその後の人生の課題としました。その思いは、先の「手紙」の最後に直接表れています。

今日は主が十字架に架かれた日です。しかし私たちは来るべき復活祭を信じるゆえに、今という日を心から感謝してすごすことができます。

神様の永遠の生命がお母様の上にも豊かに注がれていることを、お母様ご自身が心から信じ、ともにその命に預かることができますよう、毎日心の底からお祈りいたしております。

(2008年3月21日 宮子)

この手紙の後、妻は自分が重病を患いながらも、動ける間は母親のところを訪れようとし、それが出来なくなると手紙を書きました。しかしこの課題を果たせないまま、2009年9月9日、国文学者らしく重陽の節句の日に天に召されました。その義母も95歳を越え認知症が進み、クリスチャンである妻の姉と弟が時に見舞ってしてくれますが、地上において自ら信仰を告白する希望はほとんどなくなりました。しかし、義父が注いだ義母への「愛」もそして妻・宮子の両親への「思い」も真実であるが故に、神様はそれらの「愛」をまさしく「嘉して」下さっていると思います。

思えば、愛する家族のために戦中戦後を生き、それ故の罪の意識に苦しみ最期に御言葉の中に救いを見出し、それを「天晴れ」と喜びを持って受け入れ天に召された義父の姿に、戦争の悲劇と苦悩、そしてそれにも増して神様の働きの不思議を思わずにはいられません。

2014年1月15日 聖学院大学 全学礼拝